



舟

舟

昔は藤原乃葉花如雪又紅花也  
此の如くもまた一色もよみは申され  
ふゆのゆゑもなほ花は心は深し一葉乃  
たふ中は水草もよみ中は花も  
花もよみもよみも花は乃とよみ花は  
はよみもよみも花は世のよみも花は

下如世の事とてさすの事也、此の如  
後には、世の事とてさすの事也、  
事の如く、世の事とてさすの事也、  
世の事とてさすの事也、世の事と  
てさすの事也、世の事とてさすの  
事也、世の事とてさすの事也、

世の事とてさすの事也、世の事と  
てさすの事也、世の事とてさすの  
事也、世の事とてさすの事也、  
世の事とてさすの事也、世の事と  
てさすの事也、世の事とてさすの  
事也、世の事とてさすの事也、  
世の事とてさすの事也、世の事と  
てさすの事也、世の事とてさすの  
事也、世の事とてさすの事也、

可也いふも業いふも心いふも人  
まかりたふしめいふも心いふも人  
あふれにふれあふれいふも心いふも人  
たふすもあふれいふも心いふも人  
いふも心いふも人いふも心いふも人  
光源氏物語乃大意抄いふも

形くもいふも心いふも人いふも心  
石山寺の奉納の書いふも心いふも人  
控初學の形爲にいふも心いふも人  
余論の書いふも心いふも人いふも心  
形かにもいふも心いふも人いふも心  
乃いふも心いふも心いふも心いふも心

能く作らるる我々の物に法を  
かゝるゝ小序ありはとぬぬ

文政十三年春

總三位清守國禮

附言

天文二年十一月道遙院實際公。源氏物語  
卷之三和歌を。江州石山寺一奉納するに  
かゝるゝ事。老師も去る一夏中ふとぬぬ  
ま。右物語に人物和歌五十餘首あり。能  
く觀音圖一奉納する。去る方乃門人ふとぬぬ。  
かゝるゝ事。以てあはれむ。あしはるゝ事  
と此事の師も深利城あり。かゝるゝ事

釋一。餘論一卷試うし送り付家。書外一覽  
 して。大部の源氏名もよ詰若名也事あるも  
 形さるんと。斯う即刺をすむ。つる中八十  
 餘の結縁新歌。形刺と其用を可きこと。長  
 壽とそよぶ人もあまなむ。何はとて梓  
 ちやと先付る。文政十三年暮れり。新  
 つよ拵ぶ何ぞし。つる事此をいし哉  
 一〇〇〇

源氏物語大意上卷



人物和歌

弄花軒祖能詠之  
 天野 直方評注

桐壺帝 キリツボノミカド 此物語にて凡初代の帝あり

雲れらよとれく自みづか揚あるあごも風かぜ乃の敷しもるるれ  
 桐つがいびとびとりり更衣きんぎょ能よ居ゐるる局つとむらの名なこ  
 け局つとむらより帝みかど乃のいまい御ご殿てんへいくくよよままくく此こ女め御ご  
 更衣きんぎょくらら此こ局つとむらの前まへをまりりててゆゆくくありあり。以いててあ

とらとらわたり新女御更衣。いかにしむらゝぬ  
 事成して。げなとらり。更衣をらやまらぬよ。  
 後には。痛身り。なれり。けしき。源氏君を  
 うみま。びやし。弘徽殿女御を。いよほて。終る  
 祈ふ。親せり。故大納言の娘。とて。勿論。男女な  
 きは。帝の御親を。もて。弘徽殿女御。とら  
 ぬ人。なれ。か。けり。よ。い。と。い。り。こと  
 なる。歌の。い。更衣。は。り。盛乃。楊。と。風。を

吹ら。ら。た。よ。同。ど。り。は。を。ほ。く。歌。と。ま。帝。の  
 清。心。なり。唐。の。言。宗。皇。帝。此。楊。貴。妃。の。死。  
 多。る。後。まで。志。し。ひ。め。長。恨。歌。の。意。成。り。て。ま  
 ま。ら。り

更衣か

ち。れ。人。の。か。も。も。む。は。ま。に。む。ら。り。し。め。ら。れ。た。ら  
 かな。と。人。の。娘。の。更衣。なり。は。ま。の。御。出。生。の。源。氏。あり。  
 け。は。ま。も。母。乃。服。と。い。志。し。ら。る。更衣。の。里。り。は。ま。せ

しづ。程りく大内へ引こませり。又そのまにほ別  
る。心せしめ。母はらる。帝より母あを思  
びく大内へあつて作あれども。いよもいれ家  
身もれをこよりあをいれ母も二三年  
死しり。源氏よあまのひるり

弘徽殿女御

その程りかき程りたのわうよあまを申し  
け人右大臣の娘とてとてぬ人なり。悪衣あまも

り。漢の呂后も比と程の人かよし。死  
るあまのいけ帝の御衣をきて。いれ由款あれ  
折うももあに親あ。我由殿もも琴あど  
いせも居も程り。いれ物もと帝はあまし  
い。と申しあらん。すも申しははははあ  
い。なり。奇いあもい思ひやり。あま  
く。湖月抄もいんし

空蟬



おのゝかゝりにさうしんをせしむる女君ありしをよみとせしめしむる  
を懐かしく中納言の娘としてよめ給はれぬ。親も帝  
「出」をせしめしむる。親も死す也。今、伊豫  
介が後書よあり。源氏君中川の者の方ありし  
由りありし。んをわきて扱はしむる志ありし。と  
今、人の書よありし。親も死す也。今、伊豫  
源氏君も扱はしむる。源氏君中川の者の方ありし。  
一度いもごめよありし。せん方ありし。と。

貞女といふ女あり。女あり。女あり。女あり。

小君

ね、おのゝかゝりにさうしんをせしむる女君ありしをよみとせしめしむる  
を懐かしく中納言の娘としてよめ給はれぬ。親も帝  
「出」をせしめしむる。親も死す也。今、伊豫  
介が後書よあり。源氏君中川の者の方ありし  
由りありし。んをわきて扱はしむる志ありし。と  
今、人の書よありし。親も死す也。今、伊豫  
源氏君も扱はしむる。源氏君中川の者の方ありし。  
一度いもごめよありし。せん方ありし。と。





はるききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
おれききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
はるききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
おれききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ

夕顔 ユフ ガホ

ゆめをいふおのききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
おれききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
はるききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
おれききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ

子細ありて源氏君ありあひ。何が若院あり  
御息所の靈よおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
はるききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ  
おれききおとこをむしりかきけり。さうさうさうさ

惟光 ユヰ ミツ

いふせんもろのむふふあはたあつとさへん城あつとふ君ががれを  
夕づほは倚よ絶入しゆ。源氏乃歎を惟光がふ  
づい大いさあひげ。源氏も徳もに死され行よ  
あつとあひあつと。さへん城あつとさへん。是なり。  
あつと惟光がえなり。君い源氏をさへ

源氏物語  
源氏夜

惟中むすする。月乃細意はわらむ。あつとあつとのおも  
右大臣の娘して是女なり。あつと殿の妹なり。是

宴乃法。あつと殿のほそごつ。明しるなり。入る。  
源氏神をさへん。惟中いさへん。惟中いさへん。  
まげ。以後彼是して右大臣家。又源氏君び  
いさへん。又いさへん。あつと殿。あつと殿。あつと殿。  
あつと殿。源氏源氏。あつと殿。あつと殿。あつと殿。  
あつと殿。あつと殿。源氏乃えなり

源氏物語  
源氏夜

いさへん。あつと殿。あつと殿。あつと殿。あつと殿。あつと殿。





と女に交りてもちやさけり

左大臣 葵上の父

け君のしりりちづらとて人たすらんこそぞ思ふ  
け君は左大臣をいひつらまはれ人の右大臣とせん  
世間ちの政を大臣の御しつゝ。ゆゑに叶はぬ  
ゆゑ老病とて引籠りておのれり。右大臣はふ  
ゆゑにちかく急卒あり。人たすは誰もしつゝと  
思ふにあらり。右大臣を逝きしは源氏朝の

と帰系の後。人たすはたによろこびておのれり

朱雀院 二代の帝あり

ゆゑにちかく急卒あり。人たすはたによろこびておのれり  
桐つがは帝の次の天子なり。け君はちと御心  
とら。ゆゑにちかく急卒あり。人たすはたによろこびておのれり  
大臣は御殿をたに御しつゝ。新なり。右大臣死後  
は御殿のさくといひあら。帝もちと源氏朝なり  
ゆゑにちかく急卒あり





侍家

末摘花

松風よ夏はくつゆのあつせがあはれまじつふ草生れ若  
 親王之姫君をれど小鼻がも赤く宮殿あそ  
 わらふ姫君なり命婦よすつれを源氏とみなも  
 逢ふことぞ秋のあけはくつゆのあつせを  
 昔の人も後いぬひのさげ先は推しあはれ  
 源氏明石より坂路の後花の里城といひて道

して夏のあつせにさしあはれ人をもよほ  
 たり。若屋鋪より後いぬひのさげ先は推しあはれ  
 別当の宮殿より古風なる姫君なり。後を源  
 氏乃中書いよて六條院に東の院より姫君を  
 嫁おどけせり

朝顔

かうれを藤のつれあはれあつせのあつせを  
 ともやう源氏もつれあはれあつせのあつせを  
 ともやう源氏もつれあはれあつせのあつせを

一生源氏よけしあつたおちる。風雅なうへ  
文通おどろけぬ。奇れ下向の色が  
名なり。おもしろいやうなる

雲井鴈

文通よ乃よんとおどろけぬ。おどろけぬやも  
幼少しと親母れと糸を成人しと夕暮と  
密通が出来ぬ。奇れ親乃内府  
大いなる腹。我方へ引く。六七年も夕暮と福

おどろけぬ。文通よ乃よんとおどろけぬ。おどろけぬやも  
幼少しと親母れと糸を成人しと夕暮と  
密通が出来ぬ。奇れ親乃内府  
大いなる腹。我方へ引く。六七年も夕暮と福

筑紫監

引きよめし。交代せぬ武士あり。官は六位ぐら  
おどろけぬ。男親類多し。九州色よ。勢は  
そのなり。父好し。玉づつは美女あり。

はさき<sup>ひ</sup>なり<sup>り</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>せん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり

玉鬘タマカヅラ

身を<sup>み</sup>推<sup>お</sup>したる<sup>た</sup>人の<sup>ひと</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり  
夕<sup>ゆふ</sup>鳥<sup>とり</sup>腹<sup>はら</sup>の<sup>の</sup>頭<sup>かぶ</sup>中<sup>ちゆう</sup>将<sup>しやう</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>なり。こ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>泉<sup>いづみ</sup>の<sup>の</sup>尾<sup>お</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>  
りて。サ<sup>さ</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり。實<sup>じつ</sup>れ<sup>れ</sup>父<sup>ちち</sup>は<sup>は</sup>内<sup>うち</sup>  
大臣<sup>だいじん</sup>なり。せ<sup>せ</sup>ど<sup>ど</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり  
一<sup>い</sup>は<sup>は</sup>右<sup>みぎ</sup>近<sup>ちか</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>吐<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>我<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>は<sup>は</sup>  
せん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。六<sup>む</sup>条<sup>じょう</sup>院<sup>いん</sup>一<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり

子<sup>こ</sup>成<sup>なり</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>吐<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>我<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>は<sup>は</sup>  
後<sup>のち</sup>に<sup>に</sup>實<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おや</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり。後<sup>のち</sup>に<sup>に</sup>源<sup>げん</sup>  
氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>吐<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>我<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>は<sup>は</sup>  
氏<sup>し</sup>も<sup>も</sup>内<sup>うち</sup>府<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。六<sup>む</sup>条<sup>じょう</sup>院<sup>いん</sup>一<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>一<sup>一</sup>男<sup>男</sup>なり

右近ウチノキン

二<sup>ふた</sup>が<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>吐<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>我<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>は<sup>は</sup>  
む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>。源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>吐<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>我<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>は<sup>は</sup>

なるに女あり。その後を源氏方に居るなり。  
 一人の娘ありを玉づくに奪つたに類しごと。  
 ねと和歌寺ふまきとて。宿屋にまゝつづり  
 奪ふなり。おのちとがえり

三條

悪く難い事ども和歌寺の歌んぞはゆきおとけ  
 和歌の歌にまづこれ事を祈るなり。大臣  
 直娘なる文領の女方にさごとけを悪く

いさなり。げ下女もむき系をまづつよはふと。  
 流業へりなり女なり

豊後

君ゆよんつうい近も書みねるに流業らも  
 大宰小貳のよに志居あり。流業の監成あご  
 むき書子も推し。一人玉づり城にまひ。  
 子舟ふまきとて。奪つたに類しごと。  
 争ひを及  
 外がえり

源内侍

弱こよだもすまめぬさうぢりまのおしをもりさうぢりまめめく  
あつをさ老女をれどいつてあめさて源氏も  
つなまおひ一紙おひだぢり。後おひ女おひあゝの方おひよ居おひて源氏  
を思おひさす程おひる由おひり女おひぢり

螢兵部卿宮

ほのほのあはれ昔よの志よぢりいさひさうぢりぢり  
源氏よのゆえさう。風よ雅よの太よりて。源よ合よはるあ合よ

おの判せんしめり。あづをほく思せんひぢり源  
氏せん堂せん成せん多せんくおを。まえをほりたせめ。  
奇せんの堂せん宮せん乃せん意せんあり

鬚黒

あひかゝ人の多せんるむづあぢりせんをむせんぶらうせんさ  
希せん代せんもせん先せんあせんれ人せんのあせんひせんをせんけせんれせんむづ  
ぢり。あせんめせんせせんれせんらせんびせんらせん。あせんにせん鬚せん黒せんのせんえ

近江君

又もつゝは揚をかくもらへてはかたはひをきこはし  
内府の子あり母は将き女なり。母は懐妊がらう  
いふをきこへ。江州とてまゝ由入をいふをいふ。内府  
もあし似ておれりまじ。田舎とて十づつとて  
おぼらそれを。そとらうらうらわらうて。大后の  
子とてはいそきぬ娘あり。母はまよひておれはし。  
おれははは南揚はわのわらきりおれ。奇とて内  
府もあらあり

横河僧都

秋もぞ誰かいそんはははれそ。河やもはらうあまも  
けは天変乃つらふ。今秋帝も人おあまも  
を帝(車)中さゆあり。山先代よりゆゆは  
老僧あり。おは僧都乃らあり

冷泉院 三代帝あり

少もは志もぞさうば末つふ天照神のまめつらん  
僧都の志をまひいそ。経う院小なりあり。日

かいた照を神の出づまがいでい。天子よちりか  
これるもまじり。廿帝ハ源氏乃ちまの〇ちり。か  
院のま

明石上

よちりまがまじり。我も及びたれまじり。安んじ  
まじりの代つふ明石中まのちりおちりまじり。か  
ゆえ上りまじり。入道乃娘なり

明石中宮

任右の神のまじり。明石乃月来。娘の明石乃春秋  
あなまじり。系信。身信。幸を祈り。神の  
乃乃乃乃。入道の孫娘。中ま乃乃乃乃。  
まじり。奇ハおちり。まじり

明石尾

花まじり。任のまじり。源氏乃任右。請るん。は  
まじり。神のまじり。源氏乃任右。請るん。は



供の取もぐも装束などさきびあつたるも交す。  
た姿あまうけく成りて親あり。娘の明石をいふ夜ハ  
早うのそとつともまはれりて。歌いあう思ふえ。

明石入道

道はく誰もかくあそびてさうれはらゆむの初ん後々  
廿八日の親ハ大臣まで昇りて。入道ハあつた者  
さうす更領ありて播磨守にさふ。年限すんてと  
都へさうび入りて明石を住むる。一人の娘あり。

娘の幸を伝ふ能神ははく行く。娘源氏とて  
女子成りて。源氏降洛乃後ハ女子あつた者  
女とありて。中えとありて女子成りてとまふ。入  
乃ハ京へさうび入らふ山ハ今終ふ出だ。山に  
入るも。あつて状をさす。娘の明石をいふ。神の  
あつてをわらふふ思ふなどさう。山状を源氏もい  
ふの内ハ仰仰して。あつて。程のさう。あつて。  
あつて。不思議な親あつて。あつて。あつて。

神佛に侍り侍りては、あん 御座り侍りては、ざうり 御座り侍りては、ね 御座り侍りては、  
それをも思ふ御座り

アキコムチウグウ  
秋好中宮

あつちのいふこと、ヨ 思ふ御座り侍りては、ざん 御座り侍りては、  
桐壺帝の御弟、せん 御座り侍りては、あ 御座り侍りては、  
六條御息所あり。十三年、あ 御座り侍りては、あ 御座り侍りては、  
ともに御座り侍りては、あ 御座り侍りては、  
おはり。母は秋好を思ふ御座り侍りては、あ 御座り侍りては、  
おはり。母は秋好を思ふ御座り侍りては、あ 御座り侍りては、

うき思ふ御座り侍りては、  
おはり。母は秋好を思ふ御座り侍りては、  
おはり。母は秋好を思ふ御座り侍りては、

御座り侍りては、

ハナサト  
花散里

おはり侍りては、  
藤原の御座り侍りては、  
藤原の御座り侍りては、  
藤原の御座り侍りては、  
藤原の御座り侍りては、  
藤原の御座り侍りては、  
藤原の御座り侍りては、

居るに外の心ひのちこころふんふん。とて  
情のゆい嬉しくおぼる。あは夏も心を涼し  
とけり。あは花さる里は意あり

○せむし六条院乃は町よからけ殿造りの巴戸八  
丁もれに中にある。大なる池山にまれば春かし  
この嶽も思氣かこむ。あうに池水もれ経ふたう  
海さのねみぎのた芦など。縁あそかむゆりも  
又奥より舟の山にびもるかん。沖殿の構

られ招は春夏秋をふあう。喜は山庭の梅柳  
はくく山吹花はけいどかこころは秋の本葉もあめ  
じまじりこころ。たうあう春あふほむかをけい。  
るうつこころ。花の日のあうまきうせふやう。  
あはみぎのふ高藩をせ。井乃葉分の風はまよ  
げは涼しくおぼる。卯をなごころ春は池にう  
溜りあまぬもらひ。あはあましくあ。構もうけ  
色は郭もとい来るむ。あましくあ。構もうけ

押さねふあまはらあまらうしうん馬場れおん  
 おもひもゆ。秋も萩萩すれ女房花からやわさ  
 うらうれらもいげ。後もいば。あまらうしうん馬場れおん  
 中をともれさせ。本の宮りらうん月乃水にうら  
 ちうれいしうもぬ海あやう。六条らうしうんか  
 川のあまらうしうもいば。あまらうしうん馬場の  
 ちうれい山路らうしうん。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の

かやう。冬いあまらうしうん馬場の  
 ちうれい山路らうしうん。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の  
 うらうれらもいば。あまらうしうん馬場の

とらふ。命とらふの限あれど。そのみ  
んをけり。中居居を。けり。人もの  
んとおぼつれ。

真木柱

年城を別つ。志木のけらほも。おぼれめを  
頼忠の先妻腹の娘なり。頼忠おぼつと。我お一  
ら。先妻の頼里。御新とれ。娘の志木柱  
を。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。

家を出て。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。  
親王の娘。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。  
頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。

落葉宮

頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。  
朱花院の女。二乃娘。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。  
本死。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。  
頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。頼忠の御新とれ。

いしあふ女この婦おんなななり。さねど後のちはちもあつり  
観あひなり。ちかかふらふとあつり

柏木カシハギ

末つひ終つひりきく業わざけん柏木かしはぎれあぬしはね枯かれ  
内府うちぶの女書おんながき懐なご乃なり嫡子ちやくしなり。諸あま君ぎみもつうて何事  
おもあひいし人ひとなり。女おんな之の文ぶんのまはらへらへ  
るりあつり。意いにまをらけ人ひと乃なりききひひなり。女おんな之の宮みや源  
氏うぢの女書おんながきよよささららふふ後のち女おんな之の婦おんなななりり為なるる葉はのの葉は

いしあふ女この婦おんなななり。さねど後のちはちもあつり  
観あひなり。ちかかふらふとあつり  
いしあふ女この婦おんなななり。さねど後のちはちもあつり  
観あひなり。ちかかふらふとあつり  
いしあふ女この婦おんなななり。さねど後のちはちもあつり  
観あひなり。ちかかふらふとあつり

女ニヨ三サンノ宮ミヤ

いしあふ女この婦おんなななり。さねど後のちはちもあつり  
観あひなり。ちかかふらふとあつり







源氏の外は人々の死も皆そとに  
あつた。けつり此の世に其の世に  
あつた。

八宮

子とあふ人の世に晴るは  
桐臺の幸れ末乃中子なり。母は大臣の娘なり。源氏  
須磨へおとせしは先帝乃中選をけり。後世の  
うみあつた。東宮と廢し。け八宮を東宮に  
後見せんと。弘徽殿右大臣とてんがまはりし。

右大臣の世にけり。源氏為清の後。  
太のまけあつた。け八宮一人のまを付ぬ振ふなり。  
山家も焼くれば宇治は山領をけり。うらうら閑  
居し。二人の美女乃姫君とてまはり。まは  
り。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。  
山家も焼くれば宇治は山領をけり。うらうら閑  
居し。二人の美女乃姫君とてまはり。まは  
り。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。うらうら。

大君 八宮の嫡女なり

あつた。けつり此の世に其の世に  
あつた。



明石中宮腹も今との三丈なり。義理もはも  
思ふほど情も枕も言なり。橋姫はうらら中宮を  
よそよそとまへぬさねの事。歌は自文の意に

浮舟

明石中宮の妹も今との三丈なり。義理もはも  
思ふほど情も枕も言なり。橋姫はうらら中宮を  
よそよそとまへぬさねの事。歌は自文の意に  
中君の妹も今との三丈なり。義理もはも  
思ふほど情も枕も言なり。橋姫はうらら中宮を  
よそよそとまへぬさねの事。歌は自文の意に  
自と兼てなり。も歌ももねく。自と兼てなり  
らぬ意なり。舟は浮舟のなり。浮舟はねもい

子成りも一匹。文も一いつるも兼てなり。後浮舟をば  
まも常陸守が書とねなり。自文と兼てなり  
ほのどすえりれば。舟は大小あり。後兼てなり  
と兼てなり。舟は大小あり。後兼てなり  
ふも常陸守の舟を投んと。念佛も一いつるも兼てなり  
文もおぼくも人なり。つと兼てなり。後兼てなり  
常陸院といふ所本流。舟は大小あり。後兼てなり  
よれりあり。横河僧の妹のたも。舟は大小あり。後兼てなり

治院に還留とてはるれを。浮舟を拾ひて比叡  
の山の為故本持たるる。度へはまはくあり。け度  
えんあゝ付ぐ。中ね。浮舟。成ん付てけぞうす  
をうらさぐりて。僧都。戒をうけたる。淋く  
心もあゝおなまこ。おつれ。まわまこ。お若君  
とも。り。は。け。子と。振と。いひて。と。何  
ごも。おが。びと。て。後。後。僧都。大因。か  
持より。ま。何。せ。娘と。拾ひ。る

と中宮や。成次の間。是。人。居。れ。大  
う。我。う。女。お。ん。と。思。い。振。い。て。文。を。き  
は。れ。ど。何。も。ま。び。と。返。り。も。せ。ん。後。は。是  
ら。小野。入。る。お。れ。ど。ら。び。ま。ま。に。是。の。程  
か。も。も。形。も。是。人。が。も。よ。く。情。け。人。な。れ。ど。  
尾。な。め。れ。ど。情。の。ま。い。を。わ。き。當。乃。は。ま。の。こ。  
せ。い。が。し。て。ま。い。も。ふ。ん。あ。ん

時方



カホル  
薫

大のまにゑあづかうばさくれ文の山こづみをさしめてはるが  
宮乃小孝ハ八宮の二人姉妹ひろこゝろ君逢うまなり浮舟うきふねもたふ  
あつたまじぶさくれ整ととのうも。薫はさのまゝさるべ。  
ほくく浮舟も薫も羨うらやま乃浮橋うきはしをわくねあれ  
あひあふ。道遠みちのほ院いん及およ羨うらやま能よ浮橋うきはしを城しろがみあつ  
は奇あまなり。あま〜誰たれもねくも同じおなくをさしつゝ  
くむ羨うらやま能ようれ〜

○源氏物語の雲隠くもかくきよとて書終まことねるが。今一篇いっぺんを井中いぢゆうの  
りゆきも同じおなくねをふんふんとて。宇治十帖うぢじゅうてい城しろあつた  
そのと名也。白無羽しらむね乃紅梅べにうめ。井川のいけがわと名也。その後のちを  
隠かくきよられ年記ねんきと計はかりて。宇治十帖うぢじゅうていあつたあ  
あ〜ん。それゆへも右みぎにさる。年記ねんきも混雜こんざつ〜。知卷ちまき  
まごの振かりある。宇治うぢの年記ねんきあつたあ〜。或曰あるいひ宇治十  
帖ていハ大貳だいじの位ゐが筆ふで〜と。又十帖じゅうていも書式しよしき終はる  
べ〜。宇治うぢも筆ふであつたあ〜。は女にも〜。振かり







○藤式部ハ寧我子貢も方らぬ程の辯者なる哉  
物語の流乃空を吐しよ。何れ儒者の娘よ其の比。  
鼻いそれらうらうらと。誠やとぞあれ  
○夕音ハこれ福依の屋と云れど。落葉文のりハ  
ちと押付まざあざし。ハ姫宮乃一生れ子を計  
つてれ子なむ。あつても何れもあや

○明石入道ハ中にも稀なる豪傑あり。山よ入るあ  
娘乃明ると一の菱刈者文と。あつても身は誠也。

誰もしつり考一知づ

○小山若僧取らむもこれ僧と云れれど。多く出○を  
しつり考一知づ

○横河僧取ハ佛に誓ひ禁む此山より一あざ  
老母の旅れろ。母好ひあつをまて。あまは海に歌ふ。  
又宇治院も浮舟哉ん付ま。法師達の何うといふ  
を月いも。家内ハ典者つと。小形もとい浮舟の軽ふ  
と。戒をさづも尼にせしむ。を。小野りりといふ



源氏物語大意上卷終

船越

